

漢方の基本病態と基本方剤(1)

「^{き きよ}気虚」と「^{し くん し とう}四君子湯」

	^{き きよ} 気虚	^{し くん し とう} 四君子湯	^{にんじん} 人参	^{びやくじゆつ} 白朮	^{ぶくりよう} 茯苓	^{かんぞう} 甘草
p.36	^{き たい} 気滞	^{し ぎやくさん} 四逆散	^{さい こ} 柴胡	^{き じつ} 枳実	^{しゃくやく} 芍薬	^{かんぞう} 甘草
	^{き うつ} 気鬱	^{はん げ こうぼくとう} 半夏厚朴湯	^{はん げ} 半夏	^{こうぼく} 厚朴	^{しょうきよう} 生姜	^{ぶくりよう} 茯苓 ^{そ よう} 蘇葉
p.59	^{けつきよ} 血虚	^{し もつとう} 四物湯	^{じ おう} 地黄	^{とう き} 当归	^{しゃくやく} 芍薬	^{せんきゆう} 川芎
p.77	^{お けつ} 瘀血	^{けい し ぶくりようがん} 桂枝茯苓丸	^{けい し} 桂枝	^{ぶくりよう} 茯苓	^{ぼ たん び} 牡丹皮	^{とうにん} 桃仁 ^{しゃくやく} 芍薬
p.95	^{すいしつ} 水湿	^{し れいさん} 四苓散	^{びやくじゆつ} 白朮	^{ぶくりよう} 茯苓	^{たくしゃ} 沢瀉	^{ちよれい} 猪苓
p.116	^{り かん} 裏寒	^{にん じん とう} 人参湯	^{にん じん} 人参	^{かんきよう} 乾姜	^{かんぞう} 甘草	^{びやくじゆつ} 白朮
p.135	^{じつねつ} 実熱	^{おうれん げ だくとう} 黄連解毒湯	^{おうれん} 黄連	^{おうごん} 黄芩	^{おうばく} 黄柏	^{さん し し} 山梔子

●「気虚」とはどのような病態なのか？

現代西洋医学の出発点は病理解剖学であり、正常に対する異常が病変であるということから、形態学的変化が主流となり現在に至っている。

画像診断にしても形態学的な進歩は目覚ましいが機能学は遅れているため、形態的变化のない機能異常だけの人は置き去りにされている。しかし医学は生きている人間を診るのだから、形態と機能は同時に把えなければならない。

そして人間を全体として把えるとき、眼にみえる肉体という物質とその機能という把え方は非常に良いと思う。

物質である肉体を「血」、その機能を「気」とし、陰陽を「血気」として把える。生きた人間を生きたまま、大きく気と血、機能と物質として、気血の調和を健康、不調和を病とするのである。

気とは目に見えない風のようなものであり、機能そのものである。

気の異常を「気虚」と「気滞」とに分ける。ここではまず気虚について理解されたい。

**「気虚」とは「気」の不足であり「機能低下」である。
すなわち「元気がないこと」と「緩み」「弛緩」である。**

①……新陳代謝の低下により疲れやすく手足がだるく力が入らない、すぐ眠くなり言葉にも力がなく大きな声が出ない、息が続かない。脈は弱く遅く力がない。顔色は蒼白く口唇の血色がない。

*

②……全身的・局所的な筋緊張が低下しエネルギー不足の状態中空臓器、特に消化管の筋緊張低下や運動低下も多い。肛門括約筋、膀胱括約筋などの緊張低下で起きる尿や大便の失禁、膀胱の収縮力の低下による二段尿、子宮支持組織の弛緩による子宮脱などがある。

気虚には、主に「脾の気虚」と「肺の気虚」がある。

脾の気虚とは？……上記①②の症状以外に食欲不振、味覚の低下などがあり、さらに内臓下垂、子宮脱、脱肛、ヘルニアなどを伴うと「**中気下陷**」という。また腸管の蠕動運動が悪く弛緩して便秘または排便困難がみられ、ガスの排出もスムーズでないため腹部膨満感を伴いがちである。胃腸機能も消化吸収力も弱いため、すぐに胃腸をこわし下痢をしやすく、痩せ型の人もいる。

肺の気虚とは？……少し動くと息切れがして苦しくなり、ハアハアと呼吸が浅くなる。ちょっと動いただけでも、食事をしてもすぐ汗が出る。

★ここに注目！

「気虚の人＝痩せ型」ではない

一般の漢方書には気虚の方剤の適応症に「痩せ型で」と書いているが、これは誤りである。出血後の貧血や低蛋白血症、栄養失調のときも気虚の状態であり浮腫を生じることがある。同化作用よりも異化作用が弱くエネルギーに転換されにくい場合は太っていることが多い。

●「気虚」の病態を改善する補気剤とは？

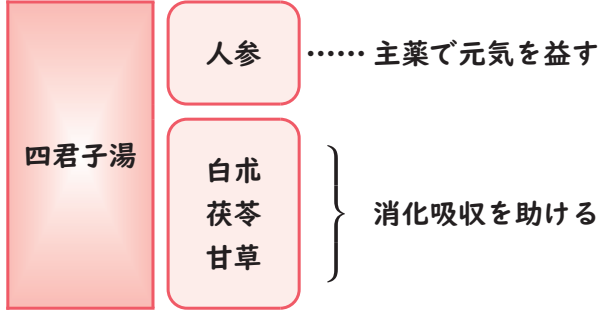
漢方ではこれらの気虚の病態を改善する薬剤を補気剤といい、精神神経系の気の低下までも改善する。西洋医学でも漢方の補気剤をうまく活用すれば、多くの人が心身ともに元気になるはずである。気虚という病態に対する基本方剤が**四君子湯**である。

西洋医学ではこの補気剤のような働きをもつものではなく、栄養剤などはその場しのぎで尿に出て臭いもあり色づくが、補気剤を服むと身体に力がついてきて尿の色もきれいになる。疲労回復のドリンクなどもほとんどにカフェインが入っていて、ヤセ馬にムチを打っている感がある。

●「四君子湯」とはどのような方剤なのか？

【構成生薬】

人参 にんじん、白朮 びやくじゆつ、茯苓 ぶくりよう、甘草 かんぞう（煎剤にするときは生姜 しょうきやう・大棗 たいそうを加える）



中医学では四君子湯のことを「健脾益気湯」といっている。その名が示すように胃腸が弱く栄養の消化吸収ができないため、元気がなく体力もない。このような者に用いて、胃腸の働きを良くし食欲を進めて栄養状態を良くし、全身の機能を高め体力を回復させる方剤である。

主薬は人参で、白朮、茯苓、甘草は消化吸収の働きを良くして元気を益す補助になり、エネルギー代謝の衰えた状態を改善する。

人参と甘草は共に体をよく潤す性質があるため、人参湯（人参、白朮、乾姜、甘草）では浮腫を起こすことがあるが、本方は利水の白朮・茯苓を配しているため浮腫を生じることはない。実に上手い配合である。

本方は体を冷やすことも熱することも下痢や発汗させることもなく、ただ体力を補うだけの君子のような薬という意味で名づけられた。

●「四君子湯」を処方するポイントは？

「食欲不振」を第一目標に処方する気虚の基本方剤であり、あらゆる病気で気虚のときには、本方を加減したものを方剤に組み込むことが多い。